

小学校の教育現場で働く、教職員の皆様へ

サポート通信「つなぐ」

編集：福祉部・こども発達相談センター

第4号



令和元年

9月吉日発行

連絡先 23-7534

9月6日（金）午後5時30分から、こども発達相談センター主催の第2回地域啓発セミナーを開催しました。

2学期早々の開催にもかかわらず、17名の参加申し込みがあり、17名全員が当日のセミナーに参加されました。「参加者の研修に対する誠実さ」や「学校現場での対応の困難さ」を、こども発達相談センター職員も強く感じるセミナーになりました。紙面を借り、改めて感謝申し上げます。

今回は、小学校1年生に係る教職員対象のセミナーでした。こども発達相談センター職員が、1学期の学校訪問で直接観察した「教員対応のすばらしさ」を中心に、通常学級1年生の対応、特別支援学級1年生の対応について、いくつかの提案をしました。セミナーの後半では、質疑応答の時間を設け、実際に抱えているケースへの提案をしました。

○参加者の内訳は、下記の表のとおりです。

	参加者
通常担当	5
特支コ	4
特支学級・特支コ兼務	4
特支学級	4



○参加者の感想

●通常学級の担当（1年生）

二学期が始まり、落ち着かない状況である。昆虫観察が楽しくてやめられない子どもへの対応として、「過剰な情報を隠す、共感する、見通しを持たせる」などの対応をし、否定せずに解決する方法を模索したい。

個別の対応だけでなく、「授業づくりや学級経営」（ユニバーサルデザイン教育）で役立つことがあった。

踏み台（配慮や支援）で、一律に「できる状態にする（まずはみなと同じようにしてあげる）」という考え方に驚いた。親子関係ではできるけれど、学校の間では難しいように思った。

応用行動分析という、気になる子どもへの振り返りで、なるほどと理解することがあった。困っているのは自分だけではないということだけでも有意義な時間だった。帰りの支度ができない子どもに対し、周りの子がやってしまう状況が続いていて、悩んでいた。この状況を考え直す機会になった。

●特別支援教育コーディネーターの感想

通常、特支学級、学年別、いろいろな特性のある子どもに対し、具体的にどのような対応があるのか、こうするとこうなるというイメージを浮かべることができた。

具体的な例を挙げてあり、分かりやすかった。

話が現実的で分かりやすいから、とても面白く聞いていたためになる。すぐに現場で使いやすい、使えそうなものも多かったです。これだけ現場に期待がかかっている。今だからこそ、教師が学ばなければならないので、今後も勉強したい。

●特別支援教育コーディネーターと特別支援学級担当の兼務

質疑応答で具体的アドバイスがあり、本当にありがたい。応用行動分析は私も少ししかじった程度で、そのあたりの話が聞け、勉強になった。

支援がどの子にどの程度必要か、それを考えることができた。指導に関する記録をとっていきたいと思う。

話しやすい雰囲気の中で、具体的な事例もあり、良かった。

●特別支援学級の担当

応用行動分析の考え方や具体的な事例への対処法を相談でき、気持ちが少し楽になった。

交流クラスの子との関係で、困ったことがあったので、聞いて良かったです。

「スモールステップでの指導がすべてでない」をなるほどと感じた。今見ている子の一人が例として挙げていた計算（繰り上がり）とお金の計算に通ずるところがあった。計算に難があるがお金はスムーズにできる

「スモールステップばかりではだめ」、やる気を高めるための踏み台を用意してあげること。やる気を大切にすること。

●セミナー内容（抜粋）

- ・小学校1年生を対象にしたセミナー
- ・発達に偏りのある子どもを想定内にした、学級経営、授業づくりをしていくこと
- ・三段階のレベルを意識すること

A 発達に応じた当たり前の支援【一例】

- 一行動に一指示
※指示理解の様子を把握
- 発問応答の形式化
※聞き方、発言の授業規律

B ユニバーサルデザイン教育

- ※個別支援を全体に
- ※視覚情報の提供 など

●授業の流れを提示

●発問を板書

C 個別対応をしていく【一例】

- ※子どもの状況に応じた配慮・支援
- ※文字がうまく書けない・・・不器用さ

●文字枠を大きくする

●板書の文字数が、ノートの文字数になっている

●とめ、はね、はらいの不正確な漢字を大目に見る

- ・正確な文字より、書くことの意欲を優先する

●不器用さの程度によっては、

デジカメやタブレット使用も想定

●宿題の量・内容を加減する

